

雪女と散歩



昨日の夜、僕の街で雪が降りました。

寒いドイツに住む人にとっては、特別なことではないかもしれませんが、僕は暖かい日本の南に住んでいます。

ここでは雪はほとんど降りません。なので、その白い花びらを幸運にも見ることが出来たのは、昨日が初めてでした。

「のび太くん！」朝、お母さんが僕を起こそうと呼びました。

「のび太くん、雪が降っているわよ！起きて着替えて、早くおばちゃんのところへ行ってあげて。おばちゃん、寒くなるのに何も用意してなかったから、分厚い洋服がいるの。このコートと、帽子と、それから手袋も持って行ってあげて。」

「えっ？」僕は寝ぼけ眼で答えました。

「わざわざおばちゃんのところまで行かなきゃいけないの？でもすごく遠いし外はとっても寒いよ...」

「のび太くん、あなた男の子でしょ！それに外は真っ白でとても綺麗よ！きつと楽しいわ！」

その言葉で全てが決まりました。

僕は厚手のコートを着て、重い冬用の靴を履いて出発しました。

まだまだ空から雪が落ちてきていて、目の前の道も普段と違って、見分けがつかせませんでした。小さい丘を歩いて、滑って転ばないように注意しなければなりません。

なんて綺麗なんだろう！

そして街はとても静かで、まるで人々は皆眠っているかのようでした。

全くどこにいるかわかんないや。どっちを向いても、白、白、白！

もう道に迷っちゃったのかな？この家も知らないし、あっちの家も見えない...。こうやって雪にすっかり囲まれちゃうと、なんだかちょっと気味が悪いや。ひとりぼっちで怖くなって、道に迷ったような気もするし...。そんな時、前に一度聞いた怖い話を思い出しました。

激しい吹雪の中で人々を驚かせ、道に迷わせるお化け、雪女の話...。あんなの、子供だましの話だけど、でも...

風は絶え間なく吹いていて、まるで冷たい手が喉に触れるかのよう。

あの遠くに見える、気味の悪いシルエットは何？長くて大きい！ただの木に決まってる！

もちろんそれはただの木でしたが、それでも僕は恐ろしくなって、わっと駆け出しました。

心臓がドキドキしながら、僕はおばちゃんの家を探しました。

あっ！やっと！あのとんがり屋根の、お庭に桜の木があるお家！見つけた！良かった、やっと見つけたよ！

おばちゃんが玄関のドアを開けてくれるや否や、僕はおばちゃんに飛びついて腰に顔を埋めました。

「麻美子おばちゃん！怖いよう！雪女が！」

「あらあら」おばちゃんは落ち着いた声でなだめると、僕をリビングへと連れて行きました。

「雪女を怖がる必要なんてないのよ。」

僕はおばちゃんに持って来た服を渡し、一緒にリビングで温かいお茶を飲みました。

「でも知ってる？」おばちゃんは聞きました。

「どうして雪女がお化けになってしまったか。」

僕は頭を横に振りました。

「彼女は若い女の人だったの。吹雪で道に迷ってしまってね、一人寂しく亡くなったのよ。今はお化けになってしまったけどね、小さな子供を傷つけるようなことは絶対にしないわ、のび太。」

興味深くおばちゃんの話聞いていた僕は、そのことについてよく考えてみました。

本当に怖がる必要はなかったのかな？

確かにおばちゃんの話は筋が通っている。雪女は若い女の人だったんだ。僕とそんなに年も変わらなかったかもしれない。

なんてひどい運命なんだろう。今もお化けとしてさまよっているのも不思議じゃない。

「お茶、ありがとう！」僕はそう言うと、靴に足を滑り込ませました。

「帰り道はもう怖くないさ！」

表へ出ると、まだまだ雪は降っていて、まるで魔法のように光っていました。

雪女の髪も、同じくらい白いのかな？

雪女の声も、木々の間を走りぬける風のような声なのかな？

雪女のほっぺたも、池に降り積もった雪のように冷たいのかな？

帰り道は、雪女にばったり会うかもしれないということは全く心配しませんでした。道に迷って、家が分からなくなる心配も、もうありませんでした。

晴れ晴れとした気持ちで、角を曲がるたびに、密かに見えかかりそうな姿を見つけ、かわいそうな女の人と一緒に家まで帰れないかな、なんて思っていました。